



農作業×E

小麦の面積を拡大しよう

平成27年産農林水産省統計情報作況情報（小麦）によりますと埼玉県の小麦の収穫量は全国5位と前年の8位から躍進しました。

中でも、熊谷市は関東1位、本州2位の作付面積を誇る（収穫量は本州1位）小麦の大産地です。

近年の作付面積は、微減続きでしたが、平成28年産は約40%増加しました。小麦が農業経営に有利と判断された結果と思われる。

次のような小麦の利点を踏まえ、平成29年産も作付面積拡大と単収の増加を進めましょう。

一 なぜ小麦が経営に有利になるのか

(1) 所得の確保
小麦は所得が確保できる品目の一つです。

小麦の収入は、水田活用の直接支払交付金、畑作物の直接支払交付金及び小麦の販売代金で比較的安定しています。

さらに収量が増えますと数量払による収入増加が期待できます。

また、小麦の生産費は、水稲と比較して、肥料費、農薬費や農業機械の減価却費など物財費及び労働費が少ないです。

このことから小麦の生産は所得の確保に大きく寄与できます。

(2) 労働時間が少なく、面積拡大が可能
表1は、10a当たりの労働時間の比較で、小麦は水稲の約15%と少なくなっています（水稲は小麦の6.7倍の作業時間が必要です）。

小麦は、収穫期間が短く、作業も田植えと重なるなど、労働が集中する問題はありますが、労働時間が少ないため、水稲より面積拡大に取り組みやすい作目です。

(3) 「さとのそら」への切り替え

1940年代から約70年間栽培されてきた「農林61号」に替わり、平成25

年産から「さとのそら」が導入され、平成26年産から全面的に切り替わりました。

収量は、表2のように平成25年産から多収となりました。平成26年2月に大雪が降った平成26年産も10a当たり約380kgの収量が確保できました。「さとのそら」が「農林61号」より収量が多い品種であることが確認できました。また、平成27年産の「さとのそら」は1等Aランクと高品質の評価を得ました。

このように、「さとのそら」は収量・品質ともに高く、「農林61号」より所得を確保することが可能です。

二 今後小麦を栽培しよう

麦の流通については、実需者との「種前契約」を基本として行われていきます。種前契約は、生産者にとつて販売先が確保され、実需者には計画的調達ができるといった、相互にメリットがある契約制度です。

是非、平成29年産小麦の種前契約を行い、高収量・高品質な小麦を栽培し、農業経営の安定を図りましょう。

表2 熊谷市の小麦の収量（10a当たり）

年産	22年産	23年産	24年産	25年産	26年産	27年産
収量	268kg	285kg	355kg	424kg	378kg	457kg
	平成24年までは「農林61号」が主力			「さとのそら」の導入年	平成26年産から「さとのそら」に全面切り替え	

出展：農林水産省平成27年産麦類（子実用）の収穫量より

表1 10a当たり労働時間（時間）

	労働時間
水稲	24.8
小麦	3.7

出展：農林水産省農産物生産費統計より